

雲南の南部山地における伝統的農業とその変容

白 坂 蕃*

Changing Traditional *Swidden* in the Southern Mountains of Yunnan Province, China

Shigeru SHIRASAKA *

Abstract

Shifting cultivation (*Swidden*) in a tradition of the Jinuo people in Xishuangbanna Dai National Autonomous Prefecture (Yunnan Province, southwestern part of China) The Jinuo, a minority in mountainous regions, places shifting cultivation at the centre of their lives.

This rational and sustainable agricultural system is well suited to the ecological environment in their region. Hunting and gathering of wild plants and insects play a very important role in sustaining communities that practice shifting cultivation. The inhabitants of the area possess great knowledge about their environment and the forest, for example, "holly hill", which is their preserved forest. While shifting cultivation was an appropriate art under conditions of low population density and abundant forest resources, the inhabitants have been obliged to change their agricultural system fundamentally because of population growth since the 1950s. The decrease of forested areas in the southwestern end of China has been caused by this population growth and increased areas needed for shifting cultivation by the minority societies. Population growth is destructive to the sustainability of shifting cultivation, along with the introduction of a responsibility system for agricultural production in the 1980s. Today, minorities are keen on introducing cash crops on a large scale such as natural rubber, tea, and herbs for Chinese medicines under the control of government authorities. The *Swidden* may be declining and the fields will change to permanently cultivated land in the near future.

Key words : *Swidden*, shifting cultivation, natural rubber production, mountain minorities, Xishuangbanna, Yunnan, China

キーワード : 焼畑, 天然ゴム栽培, 山地少数民族, 西双版纳, 雲南, 中国

I. はじめに

雲南省(面積 39.4 万 km²)の最高海拔地点は北西部の徳欽県梅里雪山の 6,740 m, 最低地点はヴェトナムと接する南東部の河口県河口の

76.4 m である。地形が南から北に向かってステップ状に上昇していくため、低緯度と低海拔高度、高緯度と高海拔高度が対応する。地形の起伏が大きく、山間盆地など比較的平坦なところは総面積の約 10% にすぎないが、農業生産にとってき

* 立教大学 / 観光学部および大学院観光学研究科

* Graduate School and College of Tourism, St. Paul's University

わめて重要である（赫ほか, 1981; 白坂, 1997）。

一方、雲南省の人口の約 3 分の 1 にあたる 1,227.9 万人（1990 年）が漢族以外の少数民族である。雲南南部の山地少数民族のなかには、基諾族のように、今日でも焼畑（定義については福井, 1983）が生業の中心である民族もみられる。

この雲南南部の地域は、いわゆる「黄金の三角地帯」の一角を占め、1950 年代以前ほとんどの山地少数民族は罂粟（ケシ）を栽培していたが、筆者の聞き取りによれば、1960 年代以降少なくとも中国側では徹底的に駆逐され、今日ではまったくみられない。

ところで、雲南については、日本の研究者を中心とする、いわゆる「照葉樹林文化論」として、早くから関心がもたれ、地域研究の大きな蓄積がある（例えば、上山 1969; 上山ほか, 1976; 渡部 1977; 佐々木, 1982, 1984, 1993; NHK 取材班, 1985 など）。民族文化についても、多くの研究がある（例えば、鳥越, 1983; 萩原, 1990 など）。さらに少数民族や彼らの民族史についても、研究が進んできた（例えば、鈴木, 1985; 馬, 1987; 愛知大学現代中国学会, 1998; 加藤, 2000 など）。雲南地域を「全体としてとらえよう」とする研究（吉野, 1993, 1997）も、みられるようになったが、山地少数民族と焼畑の関係をとらえた研究は少ない。そのなかにあって、雲南の焼畑の全体的システムとその地域的特色を論じた尹（1991, 1992, 1994, 2000）の研究は、高く評価される。これらを踏まえて、また筆者のフィールドワークにもとづき、本稿では、雲南省南部山地、とくに西双版纳の山地少数民族について、主に生業の中心となってきた伝統的な焼畑とその変貌に焦点をあてながら、自然環境および山地少数民族をとりまく社会環境との関係を明らかにすることによって、山地とそこに居住する人びととの間の共生的関係のひとつの側面を知ることしたい。

II. 西双版纳の気候と農耕文化の特色

図 1 は、雲南省における地生態学的垂直構造である。雲南の人口は標高 1,500 ~ 2,000 m の高度帯にもっとも多く、これよりも標高が高くなるに

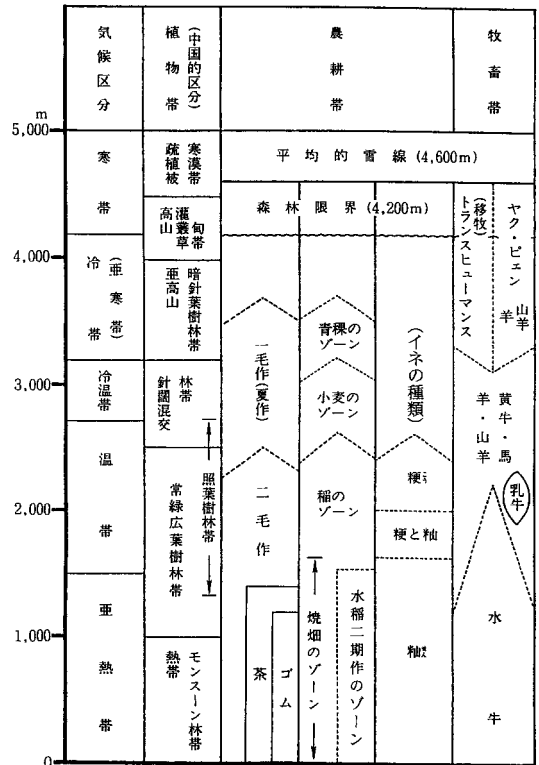


図 1 雲南省における地生態学的垂直構造（白坂, 1997, 351 を一部改変）

Fig. 1 Geo-ecological vertical structures in Yunnan.

つれて、また低くなるにつれて人口は少なくなる。さらに、雲南では気候の垂直的差異が大きく、同じ地区でも山脚から山頂にかけて異なる気候がみられる。雲南の人々は「一山四季（一つの山に、同時に四季がある）」という。海拔高度による気候の相異やそれに対応して営まれる生業を称して、土地の人々は“立体気候”、“立体農業”と呼ぶ。

西双版纳傣族自治州（約 2 万 km²：州都景洪）は雲南省の西南端を占め、前述のジオエコロジーの垂直構造でみれば、標高が 1,500 ~ 2,000 m 以下の地域にある。西双版纳には 10 を超す少数民族¹⁾が住んでいる。

西双版纳の州都、景洪の月別平均気温の最暖月は 25 を超えないし、最寒月は 15 を下回らない。1 年は雨季、乾冷季、乾暑季の 3 季に分けら

れる。雨季は5月中・下旬～10月下旬の期間で、この期間の降水量は年間降水量の80～90%に達する。11月～3月下旬が乾冷季、4月上旬～5月上旬が乾暑季である。乾季には濃霧がみられ、霧日数がきわめて多い(Yoshino, 1989; Nomoto, 1995)。景洪では霧日数が年間140日もある。濃霧の持続時間は5時間以上で、こぬか雨がふることが多い。雲南の人々は西双版纳に「霧州」のニックネームを与えている。

気温の逆転は、西双版纳の山地気候の重要な特性のひとつである(Nomoto *et al.*, 1989; 吉野, 1997, 42-48)。例えば、筆者の聞き取りによれば、勐海盆地(盆地底の海拔1,160 m)では、標高約1,400 mのところに逆転層ができる。このため盆地周辺の山地斜面における茶摘みは、盆地底よりも約2週間も早い。また景洪盆地(盆地底の海拔553 m)周辺の山地民による焼畑は、とくに800～1,200 mの間に密度が高い。これには冬季の逆転層の上限が約800～900 mの高さに形成されるのと深い関係があるものと考えられる。

逆転層の存在と後述するゴムノキの栽培にも、明瞭な関係が認められる。例えば、筆者の見聞によれば、景洪盆地は一面の水田であるが、ゴム栽培は、盆地底(標高553 m)より100 mほど上がったところから上方に多くみられる。また一般的には、山地民の集落は逆転層よりも上部に位置している(口絵1)。逆転層より下部の午前中は濃霧に包まれるところよりも、逆転層を越えるところの方が、生活環境として優れていることを推測させる(白坂, 1997, 356-357)。

景洪盆地では、第二次世界大戦後、水稻は二期作になった。水稻二期作の上限はほぼ1,000 mであるが、標高が1,000 m以下であっても、灌漑施設のない天水田では二期作はできない。

茶は、雲南省南部の重要な生産物である。西双版纳における茶の栽培は、1,000～1,400 mの間がもっとも自然条件が良い。樹齢800年といわれる「茶王樹」は標高1,310 mにある。筆者の聞き取りによれば、西双版纳の勐海盆地における茶摘みは、3月下旬から11月中旬の間に5～6回行われる。

タバコは雲南省全体としてみれば、古くから重要な商品作物(白坂, 1997, 357)であるが、筆者の観察によれば、西双版纳では1,000 m位まで栽培されている。

トウモロコシ栽培の上限は海拔2,900 mに達しているが、主産地は海拔1,000 m～2,500 mの間にある。

III. 基諾族にみる伝統的農業としての 焼畑の変容と農業近代化の方向

1) 焼畑の分布とそのシステム

雲南省における焼畑の主要な分布は、西双版纳を含む西南山地である(図2)。この地域は季節風の影響を受け、94%は山地と丘陵で、平坦地はわずか6%にすぎない。

焼畑が、なぜ雲南省南部に発達し、今日まで残存してきたかについては、次のように考えられる。第一には、この地域が温暖で、十分な降水があるため、山地少数民族が焼畑を中心として、狩猟採集をも加えた生業の形態には良い条件を提供している。第二は、複雑な山地の地形が、灌漑水稻耕作の発展を阻んできた(尹, 2000, 4-8)。第三は、漢民族の文化の中心地域からはるかに離れているため、森林の大規模な破壊を受けなかった。西双版纳は1950年代まで森林被覆率が65%であったが、1980年代に入り28.4%になった(呂, 1992)。しかし、これでも現在の中国では、西双版纳は森林被覆率がもっとも高い地域である。

一方、休閒と耕作を繰り返すことは、焼畑のもっとも基本的、かつ重要な特徴のひとつである。休閒を視点に焼畑をみると、雲南の焼畑は次の二つに類型化できる(尹, 2000, 9-11)。

1 回(1季)だけ耕作して放棄する「無輪作焼畑」。

2 年間以上耕作し休閒する「輪作焼畑」(これには3～5年間またはそれ以上の期間耕作して放棄する焼畑も含む)。

無輪作焼畑は、雲南の焼畑の基本型である。土地をいくつかに区画し、それを順序よく1季だけ耕作し、あとは長い期間休閒する。焼畑を営む山地少数民族の、焼畑のための土地区画の数(多い

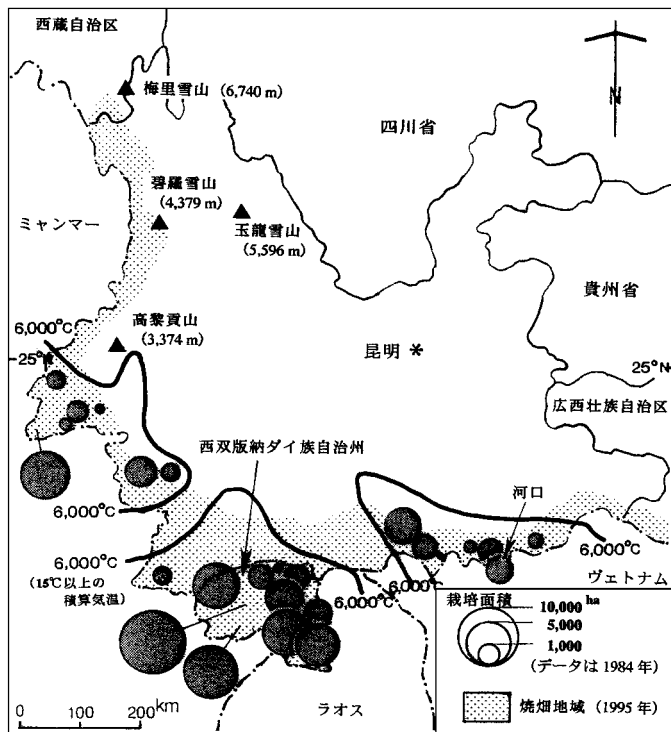


図 2 雲南省における焼畑地域と国营農場別ゴム栽培面積。
 (尹, 2000, 4 および白坂, 1997, 367 を一部改変)
 中国と国境を接するミャンマー、ラオス、ヴェトナム、そしてタイにも焼畑地域があるが、確かな情報がなく、この図上に示すことができない。

Fig. 2 Shifting cultivation area and rubber growing by state farms in Yunnan.

場合には 20 以上)は、主に彼らの人口と利用可能な土地面積によって決まるように見える。各区画は一度しか耕作しないで放棄する(無輪作焼畑)ので、十分な休閑期間がとれる。住民は毎年決められた区画を順序よく耕作する。そこには、いわゆる中世ヨーロッパの三圃式農業のように耕作強制がある。

雲南南部のほとんどの山地民族は、この無輪作焼畑の段階を経験してきた。現在でも、一部にはこの無輪作焼畑がみられるが、部分的に輪作焼畑を取り入れた民族もあるし、すべてが輪作焼畑に変わった民族もある。

筆者の聞き取りや尹(2000, 203-204)によれば、無輪作焼畑が存続する基本的条件は、年間 1

人当たり 30 畝(約 2ha : 1 畝 6.7a, 以下同じ)以上の焼畑に利用できる森林が必要である。筆者の聞き取りによれば、山地少数民族は、できるならば無輪作焼畑を営みたいと考えている。しかしながら、人口が増加し、焼畑に利用できる森林が不足すると、多くの山地少数民族は、伐採して拓いた土地を数年間耕作する、いわゆる輪作焼畑の採用によって危機を解決しようとした(尹, 2000, 34-38)。山地少数民族の間では、1950 年代の初頭から輪作焼畑が卓越するようになった。

2) 基諾族の焼畑とそのシステムの変貌

西双版纳の州都のある景洪盆地(標高約 553 m)周辺の山地における焼畑は、海拔 600 ~ 1,200 m の範囲に多く、地形的には南向きまたは東向き斜

面で、崩壊地の下方で密度がもっとも高い。このあたりでは逆転層の上限は約 900 m で、山地民の集落もほぼその高さにある（口絵 2）。前述のように、焼畑や山地民の集落立地、冬季の逆転層の上限には密接な関係が認められる。

焼畑が多くみられる西双版纳でも、基諾族はこんにちでも焼畑民族として知られている。基諾族は全部で 46 の郷（村落：かつての生産大隊）からなる典型的な山地少数民族である。この基諾族の村落を、耕作方法で分類すると以下ようになる（尹，1992 による 1985 年の状況）。

- i) 水田はなく、完全に焼畑耕作にのみ依存する村落 ...37
- ii) わずかの水田（農民 1 人当たり約 10 m² 程度）はあるが、ほとんど焼畑に依存する村落...8
- iii) 水田面積が焼畑耕作面積を上回る村落 ...1

基諾族の村落は、標高ほぼ 800 ~ 1,000 m の山腹や山頂付近に立地し、谷底での水田耕作は 1950 年代に始まった。水田開発には用地はもちろん灌漑用水の確保も必要で、彼ら自身は必ずしもそれには積極的ではないが、雲南省および自治州政府は、山地少数民族の平地への移住（その場合、既開発の水田を分け与えられることもある）をも含めて、焼畑を減少させる施策を実施している。

基諾族の焼畑で栽培される作物には、陸稲、トウモロコシ、マメ類（主として大豆）、棉、荳胡麻、胡麻、落花生、ウリ類、サトイモなどがある。かつて、棉は重要な換金作物であったが、流通が整備された 1990 年代以降では、その栽培はほとんどみられない。

山地民族の多くは、焼畑を百宝地ということもある。百宝地とは、ひとつの耕地に同時に数種の作物を栽培する、つまり混作するという意味である。陸稲も含めて混作作物の種類は、一般には 6 ~ 7 種類であるが、多い場合には 20 種類もの作物が、作物のもつ特徴を把握したうえで組み合わせられ、混作される（尹，2000，82-89）。

筆者の聞き取り（1991 年）によれば、焼畑における陸稲の生産量は、山地民族の間では一般的には 1,000 kg/ha であるが、基諾族の焼畑における陸稲の収量は 2,250 ~ 3,000 kg/h で、東南アジア

の焼畑にくらべて、その収量ははるかに高い。

基諾族は、ほぼ 1950 年以前まで完全な無輪作焼畑に従事していた。

無輪作焼畑には次の五つの優れた点がある（尹，2000，30-33；45-46）。第一は、1 季しか作物を栽培しないで放棄するので、樹木が容易に再生する。第二は、無輪作焼畑では雑草が少なく、耕作は省力化される。熱帯、亜熱帯における雑草の繁茂はすさまじい。西双版纳の多くの山地少数民族が、焼畑を“^{ランフォディ} 懶火地（燃やすだけで、手間のかからない耕地）”というのは、雑草がきわめて少ないことを意味する。第三は、無輪作焼畑では、表層の土壌のなかの害虫は、火入れによりほとんど焼死してしまうので、虫害が少ない。第四は、無輪作焼畑は耕作期間が短いので植被の回復が早く、土壌の流出が少ない。第五は、無輪作焼畑では、輪作焼畑より農作物の生産量が多い。毎回有機物が厚く堆積している新しい土地を使うので、新しい地力が得られる。灰分は熱帯、亜熱帯の山地における酸性の赤色土やラトソルを改良し、土壌の肥力を高める。

このように、無輪作焼畑のシステムは、地域の生態系を熟知した山地少数民族の所産であるといえる。

基諾族のすべての村落では、村落の土地を 13 に区画し、毎年 1 カ所を順次焼畑に利用する無輪作焼畑を、1950 年頃まで維持してきた（図 3）。基諾族も含め、1960 年代以降、雲南の多くの地域では無輪作焼畑が消え、輪作焼畑に移行した。

ところで、1950 年代の中国には、大きな社会変化がおこった。つまり、雲南では焼畑を生業とする山地少数民族も、次々と合作社や人民公社に組み込まれた。山地少数民族の土地は、元来、ムラや氏族の共有であった。合作社や人民公社による土地の公有制と焼畑民族における伝統的な土地の共有制との間には、ひとつの大きな相違点があった。すなわち、焼畑民族の土地共有制は、土地がムラあるいは氏族の所有であっても、農業生産は家族単位で行われていたのである。

一方、合作化と公社化による土地の公有制度では、生産物が構成員に均等に分配された。この結

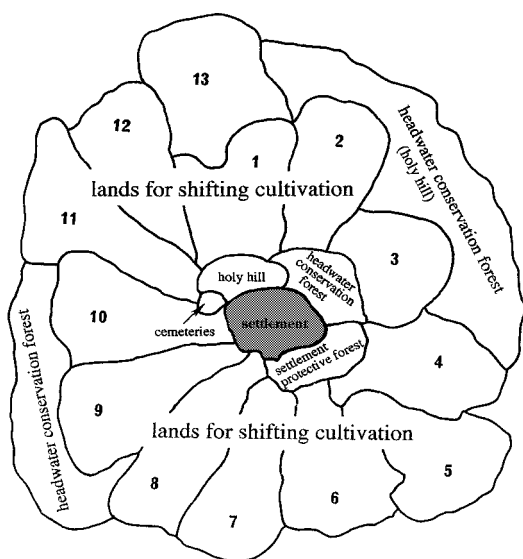


図 3 基諾族の無輪作焼畑における土地利用概念。
(筆者のフィールドワークにより作成)

Fig. 3 Land-use concept in one-year cultivation systems of Jinuo tribe.

果、山地少数民族の多くは、農業生産に対する積極性を失ない、生態環境、生産資源、また農耕に関する優れた伝統などが、大きく破壊された(尹, 2000, 61-62)。

1976年以降、人民公社制度が否定され、その代わりに家族経営が導入された。この新しい制度は、土地の公有制を前提として、家族を単位とする農業経営である。これは焼畑民族の「公有私耕」の伝統的生産制度とまったく同じで、このため山地焼畑民族の間では、すぐに伝統的な耕作制度にもどった。例えば、筆者が聞き取り(1992年11月)をした基諾族のある村落では、1983年に請負耕作に移行した。その結果、焼畑のための山林は家族数により均等に分配された。ある6人家族の農家は約3.62 haの山林が分け与えられた。この家族は、このうち約1.34 haで焼畑をしていた(1992年)。彼らは毎年4.1～5.0aの焼畑を新たに拓いて、それを3～4年間耕作し、休閑期間は7～8年である。つまり焼畑サイクルは約10年で、これが基諾族の今日の一般的焼畑サイクルである。第

二次世界大戦直後の休閑期間は12～15年であったから、休閑期間は短くなっている。

輪作焼畑は1940～50年代に始まり、その耕作が10年にも及ぶ焼畑も出現した。そうすると鋤や犁で耕すことも行われはじめた。筆者の基諾族からの聞き取りによれば、輪作焼畑の2年目からは緩傾斜地では水牛による犁耕を行い(口絵3)、中耕除草もする。陸稲の収穫は、穂刈り、根刈りの二回である。

輪作焼畑の優れた点は、林地を節約できることである。しかし輪作焼畑では、無輪作焼畑に比べて雑草の侵入が激しくなり、労働力の投入量が大きい。無輪作焼畑が、次々と新たな林地に移動するのは、耕地としての地力がおちてきたからであるといわれるが、その見解は必ずしも正しくはないと筆者は考える。つまり、輪作焼畑では雑草の除去に多くの時間をとられ、その投入労働力は無輪作焼畑の二倍になる(尹, 2000, 45-46)。また輪作焼畑の場合、とくに耕地を鋤や犁などで繰り返し耕すことも必要となるのである。

3) 焼畑を補完する採集と狩猟

雲南の焼畑は、狩猟および野生植物の採集と有機的に結合した文化複合である。焼畑を営む山地少数民族にとって、狩猟と採集は必要不可欠からざる生業の一部である。この地域にはイノシシをはじめ、象、熊、穿山甲、野牛などが生息し、作物の収穫期の8～9月には被害も多い。国の保護獣になっている象などを除いては、狩猟の対象になる。男たちは、つねには鉄砲を持ち歩き、狩猟に励む(口絵4)。焼畑民族にとって、狩猟は焼畑を補完する重要な生業である(Shirasaka, 1995, 112; 尹, 2000, 143-148)。また同じく野生植物などの採集活動も、焼畑と一体化した重要な構成要素である(尹, 2000, 128-142)。

4) 山地少数民族の“伐らずの森”

焼畑を中心にすえた生活様式を維持している山地少数民族に共通する特徴として、“伐らずの森”(日本でいう留山)の存在は重要である。この伐らずの森が、もっとも明確に存在するのは、従来から焼畑に大きく依存してきた基諾族や山達人(政府により独立した少数民族として認められてはい

ないが、彼ら自らの呼称)である。

基諾族の集落には、伐らずの森(レット)が存在する(図3の holy hill)。さらに生活用水を得るための伐らずの森(イケメ)もある(図3の集落に隣接した headwater conservation forest)。これらの伐らずの森は、一般には尾根筋にそって設けられていることが多いが、集落の周辺にある場合もみられる。さらに基諾族には村落と村落との境界に幅が数10メートルに及ぶ伐らずの森(ヒャキャ)もある。

山達人は集落よりも高いところに、決して焼畑に利用しない森をもつが、彼らはそれに特別な名称を与えていない。

山地少数民族である旱傣族には、集落からかなり離れ、また集落よりも標高の高いところに、伐らずの森(ロンティエン)がある。この森は神々の棲む山であると伝えられ、死んだ人を埋葬する場所(パーヒャオ)が、このロンティエンのなかにあることも多い。平地に住み、稲作を生業とする水傣族にも、集落の近くにパーヒャオ(ここでは神々の棲む森の意)がある。

雲南省最北部に居住するチベット族にも、この伐らずの森(ジェイダ、神の林の意)がある。

焼畑に大きく依存してきた少数民族に限らず、雲南の少数民族に、伐らずの森が存在することは、きわめて興味深い。西双版纳の山地少数民族の間には、復旧困難な斜面には手をいれないとか、水源林は伐らずの森として残すなど、さまざまな自然保護の技術が確立している。

5) 焼畑変貌の地域的条件

無輪作焼畑の存続ための条件が整っていれば、生産性の高いシステムとしての無輪作焼畑を維持できるが、存在のための条件が失われると、変貌を余儀なくされる。端的に言えば、変貌の主要因は、人口と土地との関係にあるとみられる(Shirasaka, 1995, 114; 尹, 2000, 201-205)。

1950年以前の雲南省西南地域には、流行する疫病も多く、「瘴癘之区(風土病があれ狂う地域)」といわれ、少数民族の人口は少なかった。新中国成立後、政府は熱帯の伝染病の予防対策を重視し、各地に防疫所や衛生院を開設した。この施策の下

表 1 雲南省における民族別人口(1952-1990)。

Table 1 Population of minorities and Han in Yunnan, China (1952-1990).

(単位: 1,000 人)

年次	雲南省	少数民族	漢族
1952	1,695.5 (100)	520.5 (100)	1,175.0 (100)
1984	3,362.0 (198)	1,065.2 (205)	2,296.8 (195)
1990	3,690.8 (218)	1,227.9 (236)	2,462.9 (210)

(after Shirasaka, 1995)

で、1950年代後半から山地少数民族の人口には、著しい増加がみられた(表1)。このうち基諾族の人口は次のように急速に増加した(Shirasaka, 1995)。

1953年 3,860人(100)

1964年 5,903人(153)

1984年 11,954人(310)

1990年 17,843人(462)

1995年 18,000人(466)

(1995年は、尹, 2000, 211による)

このような人口増加は、焼畑のための土地不足をもたらした。1980年代に入り山地少数民族にとっては、さらに深刻な状況が生まれた。つまり焼畑を制限するために保護林の面積が拡大され、さらに自然保護区の設置、移民の増加、森林土地法の変更(森林を国有林である国家森林、村落が利用できる集体林、農家のもつ農戸土地の3種に区分)などによって、山地少数民族が焼畑に利用できる土地が、著しく減少した。基諾族も例外ではない(尹, 2000, 213-214³⁾)。1950年代以前、基諾族の全地区面積の70~80%は焼畑に利用されていたが、1995年現在、彼らが焼畑に利用できる土地は全地区面積の25%にも満たない。

このように、いわゆる改革開放政策のもとで、1980年代初頭実施された土地所有区分によって、山地少数民族の焼畑に利用可能な面積は急速に減少し、また任意に移動して耕作するという焼畑の可能性が失われ、彼らは定住させられた。もし彼らが再び各地へ移動しようとする、まず問題になるのは、土地所有区分の実施により、すでに帰属不明の土地がないということである。山地

少数民族は、今日どのような大きな困難に直面しようとも、問題の解決のために移動することはできなくなった。

IV. 商品作物栽培の推進：ゴムノキの栽培

生態環境を精緻に利用し、それと共生してきた雲南南部山地一帯の焼畑は、とくに 1980 年代に入り、変貌を余儀なくされた。政府は焼畑を直ちに禁止はしないが、基諾族をはじめとする多くの山地少数民族に商品作物栽培を推進し、焼畑を減少させたいと考えている。そこで山地少数民族には、ゴム、茶、胡椒、パイナップルなどの熱帯作物、砂仁など各種の薬草、漆などの栽培が薦められ、1980 年代に入り、それらの作物の栽培が盛んになった。しかし西双版纳における近代的農業のシンボルは、ゴムノキの栽培である。雲南省熱帯作物科学研究所における筆者の聞き取り（1992 年 11 月）によると、中国の天然ゴムの生産は、年間約 38,000 t（消費量は約 60 万 t）で、このうち 71%（27,000 t）は西双版纳で生産される。中国における天然ゴムの供給は需要にはるかにおよばない。

天然ゴム栽培を経営の主体として、また漢族を労働力の中核とする国营農場が、西双版纳に設立されたのは 1956 年である。雲南省熱帯作物科学研究所（景洪）における筆者の聞き取り（1992 年 12 月）によれば、西双版纳における国营農場のゴム栽培面積は、毎年 2 万畝（1,334 ha）の新植があり、天然ゴムの栽培が着実に拡大しつつある（図 2）。また民営地においても、1980 年代に入ってから生産責任制の実施を契機に、ゴム栽培が増加している。雲南南部山地に居住する基諾族をはじめとする山地少数民族の民営地におけるゴムノキの植栽にあたっては、栽培技術は国营農場が指導し、その幼樹の購入費用など、財政的には州政府が援助をしている。

西双版纳のゴム栽培は、台風が無い、雨季と高温の季節、乾燥と冷涼な季節が一致している、さらに気温の日較差が大きいなど有利な気候条件をもつ。また朝の気温が低いのでラテックスの浸出時間が長い。海南島では 1 ~ 1.5 時間であるが、

西双版纳では 2 ~ 3 時間である。

雲南のゴム栽培は、今日では 25 °N にまで達している（図 2）³⁾。ラテックスの収量は、一般に標高 700 m 以下では高く、それ以上では低い。ゴムはほかの商品作物よりも収入がよく、年間 1a 当たり 70 ~ 75 元（2,940 ~ 3,150 円、1990 年）になり、1 人で約 1.3 ha を管理できる。

雲南におけるゴム栽培で、もっとも大きな問題は寒害である。ゴムノキの越冬には、日平均気温が 10 ~ 15 °C あればよいが、5 °C 以下になるとゴムノキは枯死することがある。

西双版纳は有史以来無霜であった。しかし 1973 年 12 月 22 日 ~ 74 年 1 月 7 日、および 1975 年 12 月 5 日 ~ 76 年 1 月 3 日の二回、西双版纳の大部分の地域で降雪がみられ、日最低気温が 0 °C 以下になった。このときには、3 分の 1 のゴムノキが枯死した。

寒害の主要因子は地形にあり、日陰斜面に寒害が重く、日向斜面にはほとんど寒害がない。南向き斜面と北向き斜面では一般に 5 ~ 6 °C の気温差がうまれる。また寒害は斜面の上部では軽く、下部で重い。このためゴムノキを植栽する斜面の向きが問題で、これに海拔高度と斜面の傾斜度を考慮して適地を選択する（Shirasaka, 1988）。つまり盆地底と山頂を避けたその中間がゴム栽培の適地である。ここは山地少数民族の生活領域であるため、彼らがゴム栽培に関わることになる（口説 5）。山地少数民族も、近年の中国の社会経済的動向を把握しており、ゴムノキの栽培に取り組む姿勢がみえる。しかし、中国の WTO への加盟（2002 年）によって、マレーシアやタイなどの天然ゴム生産国との軋轢による影響が懸念される。

ところで、ゴム栽培は、通常は標高 700 ~ 800 m までである。しかし筆者のフィールドワークによれば、標高 1,170 m で焼畑のあとに植栽されたゴムの若木を観察した。このあたりの標高が西双版纳におけるゴム栽培の上限である。

西双版纳におけるゴム栽培には、さらに綿密な工夫がなされている。筆者の西双版纳熱帯植物園での聞き取りによると、ゴムノキの樹列を拡げ、その間に茶やコーヒーなどを栽培すると、放射冷

却を防ぐことになり、その栽培を 200 m ほど上昇させることができる（牧田, 1995；口絵 6）。またゴム園は熱帯雨林に比べて、3～6 倍もの土砂の流出がみられるが、ゴムと茶の二層栽培によって、土壌の流出を最小限に食い止められると植物園の研究員は筆者に語った。

V. 森林によって育まれた文化としての焼畑 —結びにかえて—

今日、一般的に焼畑というと、多くの場合は、原始的農業であるとか、自然破壊の元凶であるという評価しか与えられていない。しかし焼畑はきわめて生態学の理に適った、ある種の農耕であるとさえいえる。休閒を伴う焼畑は、本来、自然の生態環境に適應した、持続的できわめて合理的な農耕の方式であると筆者は考える。山地少数民族は、焼畑のみではなく、狩猟や採集を彼らの生業に組み込んで生活を維持してきた。焼畑は、森林生態環境に対するきわめて高度な認識のもとに創り出されてきた文化であるといえよう。

第二次世界大戦後、雲南南部の山地少数民族の社会も森林生態環境も変わり続けてきた。本稿において、筆者は焼畑を営む山地少数民族社会変容の大きな要素として、山地少数民族の人口増加、雲南省や西双版纳傣族自治州の政策のもとでの商品作物栽培の大規模な導入を指摘した。

焼畑の改変やそれに代わるべき方途について、西双版纳などでは次のようなことが試みられている。

まず第一には水田の開発である。1950 年代以前の山地少数民族の水田耕作は、きわめて限られたものであったが、その後水田を開発し、それが焼畑にとって代わった山地少数民族の集落もある。

第二は常畑の開発である。焼畑を常畑にするためには、雑草の処理と地力の維持の二つの問題を解決しなければならない。また土壌侵食などの問題も考えあわせられねばならない。

第三は商品作物栽培の発展である。

1970 年代末以降、いわゆる市場経済が取り入れられ、西双版纳のような辺境も大きな影響を受けている。雲南省や自治州の政府は、西双版纳の山

地民族によるゴム、茶、漢方薬の材料である砂仁などの商品作物栽培の発展を、積極的に奨励してきた。ただし、これは 1980 年代以降、最近 20 数年のことにすぎない。焼畑をしなければ、生活がたちゆかない山地少数民族も多いので、急速な改変は時期尚早であろう。

山地少数民族による焼畑は、生態環境のみではなく、地域の社会経済的環境と密接な関係をもちながら、そのシステムを維持してきた。焼畑民族自身は、生態環境や社会経済的環境の変化に対応するために、伝統的生活様式をどのように改変すべきかを模索し続けている。山地少数民族の培ってきた、この森林生態環境に対するきわめて高度な認識は、新しく商品作物栽培の導入にあたっても、十分に力を発揮する知的資源でありつづけることが期待される。

今後は、生態環境の視点からはもちろん、国や地域の政治経済的視点からの分析もすすめられなければならない。

謝 辞

本稿は、国際連合の国際山岳年（2002 年）にあたり、UNU 国際連合大学（東京、青山）で、2002 年 2 月に開かれた「山岳生態系の保全」をテーマとする国際シンポジウムにおいて発表した論文が骨子になっている。このシンポジウムを組織された吉野正敏先生（国連大学首席学術顧問、筑波大学名誉教授）に感謝する。

注

- 1) 最大の少数民族が傣族であるために、行政的には西双版纳傣族自治州となっている。人口（1982 年）は、63.8 万人で、そのうちダイ族は 23.8 万人（37.3%）、漢族は 23.2 万人（36.3%）、その他の少数民族は 16.8 万人（26.4%）である。漢族の半数以上は国营農場に居住している。
- 2) 筆者が基諾郷人民政府の書記から見せてもらった資料（1983 年）、および尹（2000, 213-214）によれば、基諾郷の総面積は約 610 km² である。しかし 1950 年代のこの地区の総面積はこれよりもはるかに広がったという。1983 年には自然保護区の面積が 5,750 ha（地区総面積の 9.5%）で、国有林は 35,587 ha（58.5%）、集体林（村落共有林）は 4,200 ha（6.9%）、薪炭や用材林を含む農用地、つまり焼畑地は 14,955 ha で、基諾郷の総面積の 24.6% にすぎなくなった。水田は 283 ha（0.5%）である。
- 3) 西双版纳におけるゴム栽培地域は、マレーシアと比

べると 10 以上の日積算気温が 1,000 ~ 2,800 度も低い。したがってマレーシアではゴムノキは植栽後 6 年ほどでタッピングが可能になるが、西双版纳では 7 ~ 8 年かかる。なお、タッピングは 3 月中旬 ~ 11 月初旬間の 8 カ間で、毎年 1 ~ 2 月にゴムノキは落葉する。

文 献

- 愛知大学現代中国学会編 (1998) 中国 21 ; 特集中国の民族問題。中国 21, 3, 風媒社。
- 福井勝義 (1983) 焼畑農耕の普遍性と進化—民俗生態学的視点から—。網野善彦・大林太良ほか編：山民と海民—非平地民の生活と伝承— (日本民俗文化大系 5)。小学館, 235-274。
- 萩原秀三郎 (1990) 図説日本人の原郷—揚子江流域の少数民族文化を訪ねて—。小学館。
- 赫 維人ほか (1981) 雲南農業地理。雲南人民出版社。
- 加藤久美子 (2000) 盆地世界の国家論—シブソンパンナーのタイ族史—。京都大学学術出版会。
- 呂恩琳 (1992) 西南環境治理。雲南教育出版社。
- 牧田 肇 (1995) 熱帯中国の多層栽培。田村俊和・島田周平・門村 浩・海津正倫編著：湿潤熱帯環境。朝倉書店, 134-136。
- 馬寅主編, 君島久子訳 (1987) 概説中国の少数民族。三省堂。
- NHK 取材班 (1985) 中国の秘境を行く—雲南・少数民族民族の天地—。日本放送出版協会。
- Nomoto, S. (1995) Climatic variation in Yunnan Province, China. In Research Centre for Regional Geography (Hiroshima University) ed.: *Proceedings of the International Symposium on Paleoenvironmental Change in Tropical-Subtropical Monsoon Asia*. 21-31.
- Nomoto, S., Du, M. and Ueno, K. (1989) Some characteristics of cold air lake and fog in Jinghong and Mengyang basins, Xishuangbanna, China. *Geogr. Rev. Japan*, **62B**, 137-148.
- 佐々木高明 (1982) 照葉樹林文化の道—ブータン・雲南から日本へ—。日本放送出版協会。
- 佐々木高明 (1984) 雲南の照葉樹のもとで。日本放送協会。
- 佐々木高明 (1993) 日本文化の基層を探る—ナラ林文化と照葉樹林文化—。日本放送出版協会。
- Shirasaka, S. (1988) Agricultural and its change in Xishuangbanna, Yunnan province, People's Republic of China. *Climatological Notes*, **38**, 282-284.
- Shirasaka, S. (1995) Changing slash-and-burn cultivation in Xishuangbanna, southwestern China. *Geogr. Rev. Japan*, **68B**, 107-118.
- 白坂 蕃 (1997) 雲南における農業的土地利用とその地域的特色。吉野正敏編：熱帯中国—自然そして人間—。古今書院, 339-383。
- 鈴木正崇 (1985) 中国南部少数民族誌—海南島, 雲南, 貴州—。三和書房。
- 鳥越憲三郎編 (1983) 雲南からの道—日本人のルーツを探る—。講談社。
- 上山春平 (1969) 照葉樹林文化。中央公論社。
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助 (1976) 続・照葉樹林文化。中央公論社。
- 渡部忠世 (1977) 稲の道。日本放送出版協会。
- 尹紹亭 (1991) 一個充滿爭議的文化生態系—雲南刀耕火種研究—。雲南人民出版社。
- 尹紹亭 (1992) 基諾族的焼畑—兼与雲南其它刀耕火種民族的比較—。国立民族学博物館研究報告 (日本), **17**(2), 268-274。
- 尹紹亭 (1994) 森林孕育的農耕文化—雲南刀耕火種志—。雲南人民出版社, 109-114; 140-146。
- 尹紹亭著, 白坂 蕃訳 (2000) 雲南の焼畑—人類生態学的研究—。農林統計協会。
- Yoshino, M. (1989) Problems in climates and agroclimates for mountain development in Xishuangbanna, South China. *Geogr. Rev. Japan*, **62B**, 149-159.
- 吉野正敏編 (1993) 雲南フィールドノート。古今書院。
- 吉野正敏編 (1997) 熱帯中国—自然そして人間—。古今書院。

(2003 年 11 月 6 日受付, 2004 年 2 月 23 日受理)